

英語に堪能な若手小学校教師の成長と葛藤

和田 あずさ

1. 問題の所在と研究の目的

小学校で英語教育に携わる教師の英語指導経験や英語運用能力は多様である。また、小学校で他教科を指導する場合とは異なり、小学校教師歴と英語指導歴が一致しないことも少なくない。他方、小学校英語教育に関する研究分野では、「教室の事実」への理解を深める研究のさらなる充実が求められている。「教室の事実」への理解を深める方法の一つに、教師の信念について探求することが挙げられるが、教師の信念には、授業中の言動に現れるものとそうでないものがある。そのため、教師の信念の実態を理解する手がかりとして、発表者は「語り」に着目する。小学校教師の「語り」をとおして教師の信念を詳らかにした研究には、言語教師としての成長過程に焦点を当てた研究（中村・志村, 2011）、カリキュラムの変化に伴う心理的な揺らぎに焦点を当てた研究（小林, 2021）、音声指導の背景にあるポリティクスと実践とのつながりに焦点を当てた研究（大石, 2021）などがある。これらの先行研究をふまえ、発表者は、英語音声指導に関する「教室の事実」が、実践者である教師自身にどのように意味づけられ、実践的知識として蓄積され、その教師の成長へと結びつくのかを、教師の「語り」をとおして深く理解することを、研究の主題として設定した。

2. 発表の概要

本発表では、英語に堪能な若手期の教師（以下、授業者）を事例とした4つの研究（和田, 2021; 和田, 2022; 和田, 2023; 和田・ナットチー, 2023）を取り上げる。授業者は、2022年度時点で外国語活動と外国語科を担当して4年目の非常勤講師である。小学校勤務以前は、英語圏の大学院を修了し、約7年間現地で日本語を教えてきた。この経験から授業者は、英語らしいリズムや流れを重視する信念と、日本人の英語も世界共通語としての英語だという信念を有している。

発表者は、授業者が担当する授業を継続的に参与観察するとともに、授業後や各学期末に「振り返り」という形で半構造化面接を行い、データを収集している。そして、映像及び音声のデータと、これらを相互補完するフィールドノーツから逐語録を作成し、テーマ分析を行っている。本発表では、「対話的自己」（Hermans & Kempen, 1993, 溝上・水間・森岡訳, 2006）の視点を取り入れ、「英語発音の多様性」に関わる省察に表れる自己の多元性に着目して、4年間の実践経験をとおした教師としての成長とその過程で経験している葛藤について解釈する。

3. 分析と考察

(1) 1年目の省察

授業者は、英語が母語のA先生と指導にあたっていた。この年の省察では、「ネイティブの発音をできるだけ聞く」（和田, 2021, p.86）ことを重視する語りがあった。また、英語圏で生活していた時に発音で苦労したこと、その一方で日本の学校教育では全く発音について指導されなかったことに言及し、「全然違う発音では伝わらない」「思いを伝えるうえでの最低限の音声指導は必要」（和田, 2021, p.86）とも語っていた。これらの語りからは、授業者も英語に堪能であるにもかかわらず、児童が発音の模範とするのはネイティブスピーカーのALTであることを前提としていることがうかがえる。そして、この語りには、教師としての自己に加えて、英語学習者としての自己やESL環境の経験者としての自己も表れているといえる。

(2) 2年目の省察

2年目以降のALTは、英語が非常に堪能なノンネイティブスピーカーのB先生である。授業者は、B先生が授業者の発音に合わせようとすることにストレスを感じていたら申し訳ないという思いがある一方で、児童が最初に出会う英語の強勢位置は重要だという考えも持っており、「その狭間が難しい」と吐露していた（和田, 2022, p.63）。このような授業者の葛藤には、授業者が持つ、教師として児童の学びをどう保証するか、自身とALTの役割はそれぞれどうあるべきか、ともに授業を進めるパートナーとしてALTと信頼関係をどう築くかなど、複数の側面が反映されているといえる。また、ALTとの信頼関係に関わり、小学校では「英語力より、ALTの先生のバックグラウンドや思いを受け止める」ことが重要であり、そのためには学級担任が最適であるとの語りもあった（和田, 2022, p.64）。この語りからは、授業者の学級担任ではない専科教師としての自己のとらえ方がうかがえる。

(3) 3年目の省察

年度末の省察では、前年ほどB先生の発音が気にならなくなったと授業者は語り、その語りは、「気にしないようにして、落としどころをつけている」という表現から、「その方がいいかな」「そうあるべきなのかな」と、より強い確信の表現へと変わっていった（和田, 2023, p.62）。一方で、授業者が前年度までに言及していた「通じないと意味がない」「英語らしい発音は重要だ」との考え方が揺らいできたのかと発表者が問うと、「ずるいんですけど」と前置きしたうえで、やはり英語らしさは必要だと語った（和田, 2023, pp.62-63）。このことから、英語らしい発音を重視することと、発音の多様性を受容することが、相容れな

い関係にあるかもしれないと授業者が考えていると推察される。発音の多様性を認めようとする語りには、授業運営を行う立場の教師として児童にどのように育ってほしいかという願いが、そして英語らしい発音を重視する語りには ESL 経験者としての実感と、児童の英語音声の学びを保証したいという言語教師としての願いが、それぞれ込められていると考えられる。加えて、授業をとおして育てたい児童像について話題が及んだ際には「おこがましい」という表現を用いて語っていた(和田, 2023, p. 63)ことから、非常勤講師という立場で一教科・領域を超えた児童の育ちに言及することへの躊躇があることがわかる。

(4) 4年目の省察

10月には、A先生が授業に参加した際、B先生の発音にA先生が一切の違和感を示さなかったことから、各々の発音でよいのだと再確認したとの語りがあった。だが1月、中学校のALTであるC先生と授業者やデジタル教科書の発音の違いに対し、児童がどちらで発音すればよいかと質問したことについて、授業者は「聞いたままに発音すればいいとしか言えなかった」と振り返っていた。また年度末には、英語は多様であり、児童も自分の英語でやり取りしてほしいという願いや、ただ英語を教えるのではなく、他者との差異を認め合うことのできる児童を育てたいという願いと、この信念を非常勤講師としてどこまで貫くのかということの間で、この一年は特に葛藤したとも語っていた。A先生に関する語りからは、これまでの葛藤に対する答えをA先生の反応に見出していることから、無意識のうちに授業者がネイティブスピーカーを一つの規範にしているといえる。また、英語に堪能であっても自身はあくまでノンネイティブスピーカーなのだという姿勢がうかがえる。そして、児童の率直な反応を契機とした授業者の葛藤からは、非常勤の専科教師として自身の信念をどこまで貫くか、ALTを傷つけることなく児童の音声の気づきや学びにいかに関わりつけていけばよいのかなど、様々な自己に導かれる考えや思いがぶつかり合っている状態であると解釈できる。

4. まとめ

授業者が持つ、「専科教師」という枠組みを超えた一教師としての願いは年々強まっている。しかし、「発音の多様性」を認めたいと考えつつ、多様な発音に対する児童の率直なつぶやきにどのように対応すればよいのかという点については、明確な指導の方向性を持つには至っていない。また、多様な思いや考えを持つ教師との同僚性という点から、「専科教師としての自らの役割は何か」という問いにも直面し、現在は外国語活動・外国語科でALTや学級担任とつながる「調整者」として、自身の信念をやや抑制している状況であると考えられる。他方、授業者は授業実践の経験と省察という「語り」の営みをおして、自らが持つ多面的な自己を再認識し、自己の多元性への気づきから導かれる視野の広がりにより、様々な葛藤を経験しているとも換言できる。この過程で授業者が再構築しつつある小学校英語教育観や英語音声指導についての教師の信念が、今後の授業実践にどのように影響するのか、また、語りの当事者である授業者が自身の「語り」をどのように解釈し、再定義するのか、「教室の事実」と自らの「語り」から何を学びどのように成長するのか、ということ、を引き続き授業者とともに明らかにしていく予定である。

5. 謝辞

授業者をはじめとする教職員ならびに児童の皆様、その他関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。なお、本研究は科学研究費(GA20K13134 若手研究「小学校における英語音声指導に関する教師の信念と授業実践に関する研究」)の助成を受けたものです。

引用参考文献

- 大石海(2021)「音声指導のポリティクスを生きる小学校教師」『言語文化教育研究』第19号, 74-94.
- 小林悠(2021)「小学校英語専科教員の教師認知—英語教育を推進するX区のJTEの変容—」『論集/青山学院大学大学院文学研究科英米文学専攻』第45号, 19-50.
- 中村香恵子・志村昭暢(2011)「小学校教師における言語教師としての認知研究：小学校英語活動に意欲的な教師の経験と学びから」『JACET言語教師認知研究会研究収録』1, 58-72.
- 和田あずさ(2021)「小学校における英語音声指導に関する事例研究—英語が堪能な教師の信念に焦点をあてて—」*JAILA Journal*, 7, 79-90.
- 和田あずさ(2022)「小学校における教師の信念と英語音声指導の変容—英語に堪能な教師を事例として—」*JAILA Journal*, 8, 53-64.
- 和田あずさ(2023)「英語に堪能な若手小学校教師の英語音声指導観の変容過程①—授業者による語りの「揺らぎ」に焦点をあてて—」*JAILA Journal*, 9, 56-67.
- 和田あずさ・ナッチー直子(2023)「英語に堪能な若手小学校教師の英語音声指導観の変容過程②—発音の多様性に関する省察的語り」に焦点をあてて—」日本国際教養学会第11回全国大会(2021年3月19日於同志社大学)口頭発表.
- Hermans, H. J. M. & Kempen, H. J. G. (1993). *The dialogical self: Meaning as movement*. San Diego: Academic Press. (ハーマンス, H. J. M. & ケンペン, H. J. G. (2006). 『対話的自己—デカルト/ジェームズ/ミードを超えて』溝上慎一・水間玲子・森岡正芳訳, 新曜社.)